

ハンドボール競技におけるフローターの個人戦術に関する運動モルフォロギ的研究
佐々木成美 (1508026)

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールはチームスポーツであり、最も器用とされる手でボールを自由自在にコントロールし、攻防を繰り返す中で得点を競い合うことが目的にある。筆者はハンドボールにおいて、特に攻撃の多彩で華麗な突破やシュート場面に魅力を感じてきた。攻撃を成功させるためには、個人戦術を使って1対1突破を成功させるなどして数的に有利な状況を作り、攻撃を有利に展開することが必要である。筆者は、フローターとしての役割を果たすために、フェイントやパス、シュート技術を身につけ、攻撃の起点を作り、敵を引きつけてスペースで味方を生かす、自らも突破やシュートを放つなど、味方を生かして自らも突破するために必要となるフローターの攻撃の個人戦術について理解を深めたいと考えた。

本研究の目的は、フローターの攻撃における個人戦術の運動過程を類型化するために、シュート到達に導く起点となったフローターの個人戦術に着目して運動観察し、それぞれの運動構造を運動モルフォロギ的に明らかにしていく。更には、そこで見出された課題や改善点を、今後の競技生活の中や、指導する機会があれば生かせるものにしたいたいと考える。その方法として、マイネルの運動学における運動モルフォロギ的考察を用い、ビデオによる印象分析を中心に進め、運動を間主観的に捉えていく。具体的には、様々な研究対象、構造特性、個人戦術の体系を把握した後、平成23年度全日本学生ハンドボール選手権大会における女子の上位に進出した大学のフローターを観察対象として、フローターが起点となってシュートまで到達した攻撃場面から、典型例として把握できるフローターの個人戦術を抽出し、マイネルの運動カテゴリーを用いて分析、考察を行う。学生は高度な競技力の仕上げと定着の段階にあり、専門的な領域にあるので、力強い巧みなプレーが随所に見られ、さらに高度なプレーの中にも安定した基礎が見られると考えたことから、全日本学生ハンドボール選手権大会を対象とした。

<本論>

第1章 ハンドボール競技の構造特性

ハンドボールは、走る、跳ぶ、投げるなどの人間の基本的な動きを基盤として、スピーディーでダイナミックな動きと高度な判断力を駆使したスポーツである。ここでは、ボールゲームの一般理論に基づいてハンドボールの特性をまとめ、シュート到達に導くための起点となりやすい1対1の突破状況における個人戦術を中心に研究を進めていく。その中で、ディフェンスをかわす際に特徴的に表われてくると考えられるフェイク動作の重要性に注目し、構造体系を捉えている。フェイントには相手の動きに応じて動くという側面の他にも、相手を自分の思うように動かすという側面まである「対応動作」が必要である。

第2章 ゲームの運動観察法について

本研究では、運動観察法として運動モルフォロギ的考察法を用いる。これは、スポーツ運動を目を通して外から知覚してだけでなく、体験し、“中から”知覚することによって大きく補充され、拡大されるものであり、印象分析のなかに隠されている事実や微表、関係を確認させてくれる。また、自由観察法およびフィルム、ビデオによる観察法も用いて考察していく。その際、他者観察の不可欠な前提となる印象分析を行い、マイネルの運動カテゴリーから、攻撃の1対1を捉えるために有効と考えられる「運動の局面構造」「運動リズム」「運動の先取り」「運動の正確

図表

さ」の4つのカテゴリーを中心に運動構造を理解していく。印象分析を行う際に、運動共感できるようにすることで他者観察の自己観察化を充実させ、より客観的な運動観察を行うために「共同観察」を用いて研究を進めた。類型化とは、様々な物事の中から共通点や類似点を抽出し、いくつかの類型に分けて普遍化することである。シュート到達に導く起点となるフローターの個人戦術に着目して観察する中で、動きの形態の共通点や類似点を抽出し、運動の組合せ・構造体系を明らかにすることが本研究における類型化である。これによって、それぞれの動きの本質を理解することや、個人戦術の運動形態やそれらの特徴を知ることにつながる。

第3章 攻撃における個人戦術の類型化

この章では、平成23年度全日本学生選手権大会の試合におけるフローターが起点となってシュート到達までつながった攻撃場面から、そこに観られるフローターの個人戦術を抽出し、典型例となりうる各場面の運動経過を印象分析と運動カテゴリーを用いて結果の考察を行うことによって、フローターの攻撃の個人戦術について明らかにしようと試みた。結果として、フローターの個人戦術については4つの類型、その中で特徴的に表われていたフェイク動作の類型は4種類観察することができた。さらに、筆者の知識と経験を踏まえながら、今回観察された他にも考えられるフローターの個人戦術の組合せや、フェイントを既存の構造体系を基に比較し、新たに考えられる運動の可能性についても試論として以下に示した。

	【個人戦術】	【フェイク動作】
類型	<ul style="list-style-type: none"> ・フェイク動作から突破（ドリブルあり/なし） ・フェイク動作からパス（ポストパス） ・走り込みからの素早いポストパス ・ワングロスからブロック 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストライドストップフェイント ・パスフェイント ・シュートフェイント ・回旋フェイント
試論	<ul style="list-style-type: none"> ーフェイク動作からミドルシュート 	<ul style="list-style-type: none"> ーゼロストップフェイント ー回転フェイント ーダブルフェイント

<結論>

本研究では、シュート到達に導くフローターが起点となるプレーの個人戦術の運動経過を観察し、マイネルの運動カテゴリーを用いて分析・考察することで、フェイク動作やパス及びシュート運動などフローターの個人戦術における運動の組合せについて明らかにすることができた。運動カテゴリーは正しい動きの徴表であり、これによってフローターのプレーの諸徴表が明らかになり、「共同観察」によってより間主観的な観察ができた。個人戦術は、各チームの攻撃の基盤に応じて選択し、発揮されるため、常に3対2や2対1などの数的に有利な状況を作り出すことを目指した、チームのための1対1であるということを念頭に置くことが大切である。攻撃の起点を作る機会が比較的多いフローターが、諸徴表を理解しながら多くの個人戦術を身につけ、経験を積んで確実なものにしておくことで、発揮するプレーの幅は広がり、チーム力はさらに向上するといえる。類型化によって個人戦術の運動の組合せの知識は豊かになり、指導する上では運動の本質を見抜き、自分の運動として知覚し、それを伝えていくことが重要であると思われる。フローターに限らず、チームの1人1人が運動カテゴリーを理解し、ポジションに応じて多彩な個人戦術を身につけることで、チーム全体のプレーレベルは確実に向上していくと考える。

(引用・参考文献省略)